

踏 み 跡 < My mountains >

南アルプス	白根御池から北岳往復	No.071
-------	------------	--------

昭和41年10月8日

8時30分国立駅に集合。メンバーは高校の同級生の佐藤君と会社の先輩のTさん。目指すは白根三山縦走。中央線で高尾に向かう。土曜日ではあるがラッシュ時で電車は満員。

満員の第二アルプスが通過していく。乗らなくてよかったなと思うような混み方。

我々は高尾発9時20分の甲府行、発車10分前でも乗客はまばら。こんな電車があることはあまり知られていないようだ。通勤ラッシュの時間帯には同じ線路を快速電車が走るため、新宿発の中央本線は少ない。

その間は高尾駅と八王子駅から甲府行が出ている。

と言うわけで我々を乗せた電車は、定刻どおり高尾駅を発車。

小仏トンネル、相模湖、大月、笹子トンネルと過ぎ、甲府盆地に入ると今まで重く雲を垂れていた空が青く広がってきた。盆地の西のはずれに、甲斐駒をはじめとした西山の峰々がトレーシングペーパーを乗せたら映し出せそうに見えるが、盆地の中は靄のような薄い雲がかかっており、すかつししない空気が漂っている。盛りの過ぎたぶどう棚の間を走るうちに石和、酒折と過ぎて御坂の山並みの後ろに雲から顔を出した富士が見られるようになり、電車は11時32分に甲府駅に滑り込んだ。

富士の山肌は、一週間ほど前に降った雪が細く白い筋を残している。

甲府は賑やかな街だ。駅前の様子は来る度に変わっているように感じる。数年前までは破屋だった山梨交通のバス乗り場は、今ではバスターミナル

を兼ねた「山交」というデパートに生まれ変わり、今や甲府の象徴となりつつある。

バスターミナルで時刻表を調べると、芦安行は12時20分発なので、荷物を置いて昼食。バスは定刻どおり発車(130円)。

登山客は我々三人のほかに二人連れのパーティで、同じように広河原から北岳を目指すという。

甲府市内の釜無川や中巨摩の御勅使(みだい)川沿いの道は先月の台風でかなり荒らされている。

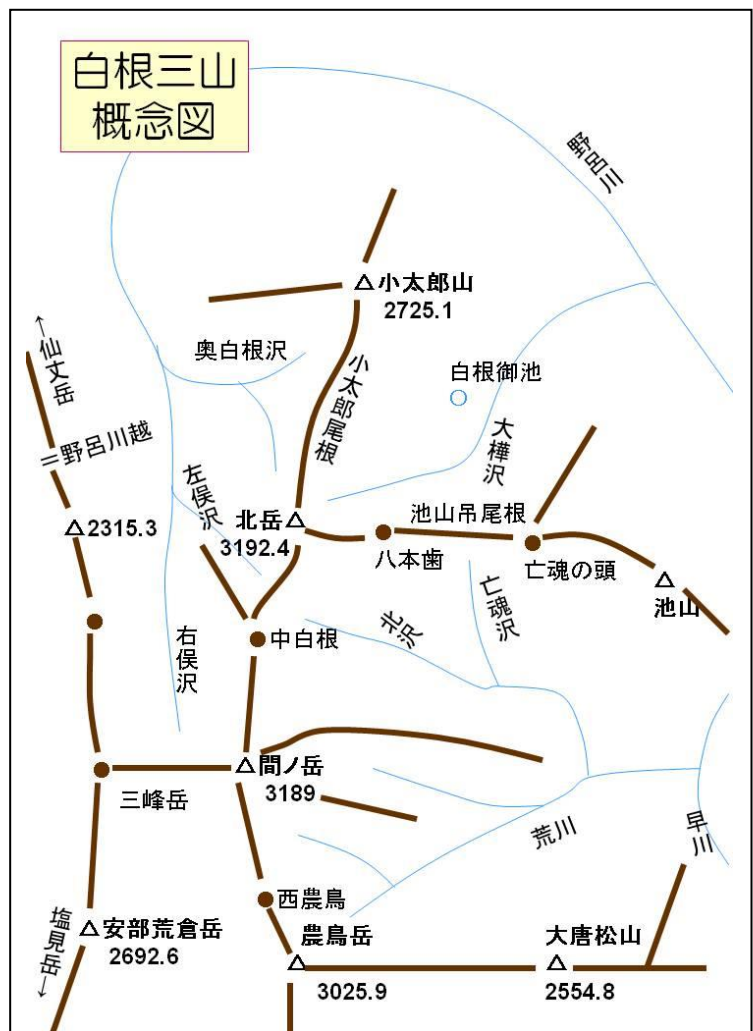
六科(むじな)で10分ほど停車し、芦安に13時35分に到着。うまい具合に岩園館と桃栄館の車が止まっているので、直ちに広河原までの価格交渉に入り、二人連れのパーティと合流して、5人で2400円と決まった。調味料を忘れてきたので、味塩を一本購入してライトバンに乗り込んだ。

20分余の登りで夜叉神トンネルを潜り、野呂川左岸の中腹を巻くように走り、観音溪谷を眺めているうちに眠くなってきた。

目が覚めると行く先にきれいな鉄の橋が見えて程なく広河原に到着、14時35分。

14時45分出発、白根御池まで二時間半と書いてあるから、17時過ぎには着けるだろう。

きれいな橋を渡り国民宿舎の工事現場を過ぎて林の中を10分ほどで大樺(おおかんば)沢の渡渉。そし



踏み跡 < My mountains >

て大樺沢の左岸の緩い登りがしばらく続いたのち、急登が始まった。日ももう山の端に隠れたので暑くはないが、出鼻をくじくような急な登りに背中荷物もずっしりと重い。木の根をまたぎ急登を続けるうちに沢の瀬音もいつしか眼下に遠くなり、徐々に山腹を巻くようになると、「白根御池へ30分」と書いた大きな道標が現れた。出発前の読みどおり17時15分に二棟の小屋が建つ白根御池(2308m)に到着。

広河原は海拔1500mだから、800m登ってきたことになる。大樺沢の紅葉が美しい。小屋の西側の、北岳と吊尾根が心ゆくまで眺められる天幕場に幕営。

米5合を炊き、野菜炒め(ジャガイモ、タマネギ、ニンジン、ピーマン、サラミソーセージ、チーズのバター炒め)で夕食。薄く雲の膜がかかったような空で星はかすかに見える。明日は降らなければいいが……。

20時シュラフに入る。あたりは静寂そのもの、寒くない。

昭和41年10月9日

起床4時、目が覚めると雨音が天幕を叩いてマズルカを奏でている。

昨晚の夕食の残りに野菜を加えて味噌汁にし、これまた昨晚の残りの飯を入れて雑炊。

食事の後、天幕をたたんでいるうちに本降りになってきたため、小屋に避難してしばし様子を見ることにした。秋の冷たい雨に濡れて3000mの稜線を歩くのは相当な危険が伴う。特に高山経験のない二人にはかなりの負担があらうと考え、出発は差し控えて天気待ちとする。フォルティシモの雨音を聞きながらストーブに手をかざし、本日の作戦を検討。

出発予定時刻 5時半を一時間半過ぎても出発できぬ場合は三山縦走を断念し、サブザックで北岳のピストンということに決定。

7時をわずかに過ぎた頃、雨は止み、ところどころの雲が切れて青い空が見え出してきた。そして、見る間に青空は広がり、北岳バットレスが一面の碧空をバックに視界に広がってきた。

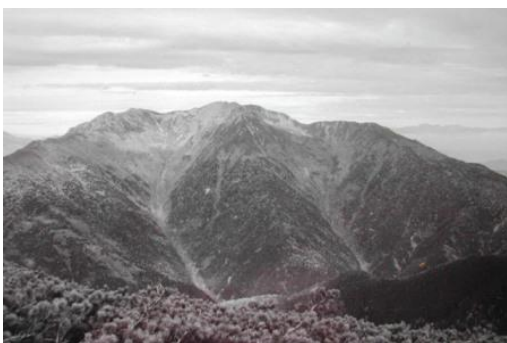
「よし、行こう!」という掛け声とともにサブザックのパッキング。天幕は、乾燥するようにと、もう一度張り直し。

7時15分出発、灌木帯の中のボサの入り混じった斜面を登っていく細い道。振り返ると、高嶺、地藏岳、観音岳、薬師岳、辻山と夜叉神峠に連なる稜線が逆光に黒く浮き出されて美しい。眼下に小さな白根御池と数張の天幕。

草すべりで樹林帯とはおさらば、北東の雲の上にハヶ岳が、吊尾根の上に富士が顔を出してきた。

岩礫帯を段々に登っていくようになり、8時30分に小太郎尾根の稜線に飛び出した。標高 2850mハヶ岳の主峰と同等の高さである。正面の視界がパッと開け、北に甲斐駒その左に仙丈と南アルプスの雌雄の名峰が手に取るように。双方とも下半身は黄紅色に紅葉し、上半身の褐色の岩肌と花崗岩の白さがあいまって、表現しがたい美しさ。

仙丈の左には、木曾駒を筆頭に恵那山まで連なる木曾山脈、仙丈の隣には北アルプスの山々がうっすらと雪を付けて。さらにその右には妙高、戸隠……。



小太郎尾根の行く先に立つ北岳頂上とバットレスの姿は雲上人の雰囲気を感じさせる。

肩の小屋までは、ハイマツの中に一筋岩屑を敷き詰めたような道が続いている。既に白みがかかった雷鳥が右へ左へ餌を求めてうごめいている。

肩の小屋を過ぎると稜線は標高 3000mを超えて岩稜となり、やがて待望の 3192mの北岳頂上に到達、9時55分。間岳は

沸きあがる雲に隠れて半分しか見えず、塩見岳がうっすらと見える。やはり富士山に次いで日本で二番目の

踏み跡 < My mountains >

山だけあって、周りに見えるどの山にもひけをとらない。景色を楽しみながら昼食と大休止。しかしながら、足元に目をやるとゴミの多さと落書きに驚く。人間の邪心によって汚されたという感が強く、実に悔しい 3192mだ。

せめて間岳ぐらい往復してみようかということになり、11時10分に出発。

中白根から間岳への登りは結構ボリュームがある。バカ尾根、三峰岳が見られるところまで行ったが、時間的に無理そうなのでここで折り返すことにした。雲が湧き出て来はしたがまだまだ青々とした秋空がうかがえる。ハイマツと岩屑を敷き詰めた稜線は雲上の楽園と呼ぶにふさわしい。

北岳への登りに入らんとした時のこと、湧き上がる雲が流れて行くことなく青空を隠してしまい、さめざめと涙を流し始めた。そして青空が隠れてからわずか数分後、突然周囲がヒヤリとしたかと思うと「パラパラパラ」という音に変わり、驚いているうちに今度は「バラバラバラ」、次には「バタバタバタ」。障子に節分の豆をぶつけたような音とともに直径2mmほどの霰の猛攻。

先ほどまで火照っていた手は赤くなり、かじかんで言うことを聞かない。あわててポンチョをかぶると、ポンチョの表面を音を立てて転がっていく霰。

肩の小屋あたりまで来ると霰も治まり雨。雲の流れが止まり、雨が降り、霰になるまで僅か数分の時間しかたっていない。大自然の持つ恐るべき脅威を、身をもって体験した。

白根御池の天幕場に戻ると14時30分。日曜の午後、しかも明日は祭日とあって天幕場は賑やかで、小屋は二棟とも満員のようだ。炊事に入る前にウイスキーと焚き火で体を温める。16時夕食準備を開始、今日の当番は佐藤君。

暗くなるにつれ素晴らしい星空が現れてきた。味噌汁とご飯の夕食を食べてしばし雑談の結果、明日は見納めにもう一度北岳に登ってから下山しようということになった。

19時にシュラフに入る頃には星屑を散りばめたような夜空になった。

昭和41年10月10日

4時起床、パッキングを済ませて6時40分出発。

帰りの荷物を軽くする為、天幕は張ったままで乾かすことにした。抜けるような青空、ハイマツの影で何枚かのスケッチをしながら登り、北岳頂上には10時に到着。

(右写真:再び北岳山頂へ)



イワヒバリがゴミの山に集まる様子を眺めながら食事と昼寝。間岳と塩見岳も姿を現し始めた。

下山路は八本歯から大樺沢のルートを選んでみた。天幕場に14時帰着。

天幕を撤収し、14時35分下山開始。

広河原16時10分着。帰りの車の交渉は、ライトバンで甲府駅まで5人で3500円で成立。

甲府駅着19時、ビールで乾杯して夕食を食べ、20時27分発の上り最終列車に乗った。連休最終日のせいか満員に近い状態だった。

以上

(修正・更新:2023年11月)